【 8 】

氏　　名	宮川美佐子（みやかわ みさこ）
学位(専攻分野)	博　士（文　学）
学位記番号	文博第 167 号
学位授与の日付	平成 13 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科英語学英米文学専攻
学位論文題目	Narrative Frame in Conrad's Fiction: the Straggler, the Narrator, and the Audience （コンラッドの作品における語りの枠構造：落伍者，語り手，聞き手〔読者〕）
論文調査委員	（主　査） 助教授 佐々木　徹　　教授 中村紘一　　助教授 若島　正

論文内容の要旨

コンラッドの作品で繰り返されるパターンは，通常のモラルの規範を踏み外してしまった人物がストーリーの中心にいて，その人物について別の作中人物である語り手が語るというものである。多くの場合，その語りは友人間での口頭のコミュニケーションであり，聞き手もまた登場人物として作品中に現れる。これは語りの枠（narrative frame）を使用した，いわゆる入れ子状（Chinese box structure）と呼ばれる形式で，本論の目的は，コンラッドの作品におけるこの frame の使い方を分析することにある。

語りの枠を用いた作品に見られる特徴的な意味は，人間の連帯と共同体へのこだわりである。コンラッドにとっての共同体の重要性はよく知られている。ストーリーの中心人物（作品自体の中心人物とは限らないが，便宜上，以下「主人公」と呼ぶ）は，もはや共同体に留まることができない。大抵，語り手は彼が関心を持つ主人公と，彼が忠実であるべき共同体との間で板挟みになっている。語り手の言葉は共同体にとっての主人公の行為や存在の意味づけをし，語り手を共同体に留めている。聞き手は共同体の代表者で，語り手の訴えかけの対象だが，読者と重ねあわされている。つまり，作者は読者をも共同体の一員として取り込もうとしている。コンラッドは読者との連帯という概念を小説家の達成すべき理想として挙げたことがある。言い換えると，語るという行為そのものが，作中人物にとっても作者にとっても連帯をもたらす重要な手段と見なされているのだ。そこで，このパターンを持った一連の作品を通して，コンラッドの小説における主人公，語り手，聞き手の関係を分析し，さらにはそこから窺うことのできる作者と読者の関係の変化，作者の共同体に関する考えの変化について検討したい。

第1章では "Heart of Darkness" を取り上げる。この作品では語り手マーロウと聞き手とは船員という共同体の絆で結ばれている。もちろん読者は船員とは限らないが，聞き手が現在では船員を引退し，一般的な中産階級の人間になっているという点に聞き手と読者をつなぐ工夫がある。

言語で何かを言い表すことの困難がこの作品の大きなテーマであるということは，既に言い尽くされた感がある。それでは，マーロウはなぜ敢えてカーツについて語るのか。この問に対しては従来三通りの答えがある。すなわち，捉え難い経験に何とか言葉によって形を与えようという欲求，帝国主義の残虐さを聞き手に教え啓蒙したいという教師のような気持ち，そして帝国主義に加担している聞き手を弾劾する告発者としての気持ちである。これらはすべてある程度の妥当性を持つが，どれもマーロウにとっての聞き手の重要性を考えていないために，充分な説明ではない。

マーロウの語りを説明する鍵はカーツの婚約者についた嘘にある。アフリカから帰ってきた直後のマーロウは文明，モラル，言葉といった人間の造り出した物全般に絶望している。しかし，彼はカーツを高潔な人物と信じて疑わない婚約者の幻想を守り，そのことがマーロウにとって西洋文明への最後の希望をつなぐ象徴的な行為となる。ところがその希望はモラル上は誤った，偽りの言葉によってもたらされるという逆説がある。そこでマーロウは自分の仲間である船員たちに婚約者への嘘を告白し，今度は体験をありのままに語ろうと努める。つまり，マーロウの語りは語り手当人と聞き手の双方に益をも

たらすものであり，一方通行的なものではない。とはいうものの，後期の作品と比べると，語り手には無知な友人に知識を伝えるというやや教師めいたところが確かにある。

最近のフェミニズム，ポストコロニアリズム批評では，この作品について「読者が中産階級の白人男性に制限されている」という批判があるが，本論ではこの主張に対して，より広い対象の読者が可能であることを再確認する。マーロウの言葉には「butcher と policeman にはさまれて安穏と生きている者」への苛立ちが見受けられる。このうち，policeman は人が被害者とならないよう守ってくれる存在だが，butcher は人が加害者である，つまり他の生命を犠牲にしなくては生きて行けないことを忘れさせてくれる存在だ。policeman に比べて butcher はなぜか全く批評で取り上げられてこなかったが，この語はマーロウの加害者としての自覚の強さとともに，人種や性別を問わずすべての人間が彼の訴えの対象となりうることを示しているはずだ。

第2章は *Lord Jim* で語り手マーロウが主人公ジムを描写する際に頻出するフレーズ，“one of us” について考察する。マーロウは，共同体の示す職業倫理に基づく地道な生き方と，ジムの示すロマンティックな生き方を共に “us” という単語で表すことによって両者を融合しようと試みる。しかし二つの “us” にはどうしても相容れないところがあり，マーロウは最終的には人種による “us” と “them” を持ち出して，やや強引にジムを共同体の一員として認めさせようとする。

語りの状況は “Heart of Darkness” に似ており，聞き手は共同体を代表する船員である。実際は，マーロウは “Heart of Darkness” の時よりさらに共同体に対して懐疑的になっており，心情的には主人公に魅かれている。したがってこの作品の中心となる連帯は語り手と共同体ではなく，主人公と語り手の間に存在する。

一方で共同体の必要性は失われていない。そこで，マーロウは自分の疑念を聞き手には隠し，効果的なフレーズを操作して，ジムと一蓮托生に共同体からはぐれるのではなく，ジムと一緒に共同体に留まろうとする。マーロウはもはや教師めいた態度は取らないが，聞き手と読者を主人公の味方につけようとするのだ。

“Heart of Darkness” と *Lord Jim* は書かれた時期も近く，類似性はこれまでにも指摘されてきたが，第3章で取り扱う *Under Western Eyes* の frame は，この二作とは趣を異にしている。語り手はこれまでと違い，終始主人公から距離を置こうとする。したがって，主人公ラズモフはジムのように語り手の老教師に告白をすることができない。また，語り手が “unreliable” であることは既に言われている。語り手はしばしば読者に直接呼びかけるが，読者は語り手に距離を感じる。“Heart of Darkness” や *Lord Jim* の船員の集団に代わって官僚や革命家が主人公の帰属すべき集団として現れるが，専制政治の道具として非人間的にしか機能できない官僚も，大義より各自の利益を優先させる革命家も，どちらももはやコンラッドの理想としている共同体を構成しているとは呼べない。

しかし他の作品と同様，主人公にとって他者の理解を求めて語る，告白するというのは切実な欲求である。これに関しては，特にルソーとドストエフスキーが反面教師として大きな存在だ。コンラッドにとって，この二人の提示した告白の形は自己正当化の強い，容認しがたいものであり，ラズモフの告白からこの要素を極力排除しようとしている。しかし理解を求めての説明と自己正当化の差は紙一重であるため，主人公の告白は非常に困難なものとなり，そのことが作品中の一大テーマとなっている。

コンラッドは彼が尊敬するジェイムズと違い，視点の厳密な一貫性に注意を払わなかった。*Under Western Eyes* でも視点の乱れは大きな問題であり，老教師の語りには彼の知るはずのない情報がかなり混じっている。これを合理的に説明しようとすれば，語り手が嘘つきということになってしまうが，いっそ二種の語りの混在を認めると分かりやすくなる。老教師の語りに紛れ込んだ全知の語り手は，主人公におおむね味方する。この語りの複雑さは，ロシア情勢という作者にとって微妙な題材に起因しているようだ。ポーランド人の作者は，イギリスで自分がロシア人と混同されることを苦々しく感じていた。自分がイギリス人であることを強調し，ロシア人は理解不能だと主張する老教師はコンラッドにとってイギリスの読者に対する安全な仮面であったと思われる。その裏で彼は主人公に対する共感も語りに潜ませている。

結局，ラズモフは愛する女性に告白を果たす。主人公と語り手の教師，教師と読者の間には連帯はないが，この告白にごく微かな個人同士での連帯の可能性が示されている。しかし，それが主人公に救いをもたらしているかどうか，また小説全体の結末に肯定的なものがあるかどうかは非常に曖昧だ。結末では二重の語り手が読者に正確な情報や役立つ解釈を提供することももはやなく，語りは事実の羅列に留まる。このことはあたかもコンラッド自身が読者のために説明をすることから

手を引いたような印象を与える。こうして，奇妙な語りを使用したこの作品全体を作者の苦渋の告白とみなすことができるだろう。

以上三章をまとめると，一応の流れを見出すことができる。三作品とも，もともと懐疑的な小説ではあるが，共同体と読者への信頼の崩壊は後になるほど大きくなっているようだ。"Heart of Darkness" ではアフリカを離れれば共同体はしっかりしており，読者に対する教訓らしきものもある。*Lord Jim* では語り手は共同体をどうにか保持するが，その強引な操作には読者への不信が潜んでいる。*Under Western Eyes* には共同体は登場しない。わずかに個人間の連帯の可能性が残されている。*Under Western Eyes* はよくも悪くも，共同体を追われた主人公，作中人物の語り手，聞き手というパターンを用いて連帯というテーマを極限まで突きつめた作品であると言えよう。これ以後多くの作品が全知の語りで語られるようになり，frame を使ったものがあっても上記のパターンが崩れ，伝統的な仕掛けの域を出る特徴がない。

第4章は，同じパターンを持つ中短編についての考察で，作者の活動期間のほぼ全般にわたる多様な作品がその対象となる。コンラッドの長編と短編の作品間に密接な関係があることは既に指摘されており，短編は長編に劣らず重要なものである。聞き手の役割の重要性は "The Lagoon" にその萌芽が見られ，共同体の重要性や，その代表である聞き手を通じて読者を巻き込む形は "Youth" で完成する。その後は共同体の持つ危険やその不安定さが強調されるようになり，"The Warrior's Soul", "The Tale" など後期の作品では連帯より孤立が目立つようになる。これは最初の三章で論じた作品から類推される変化と一致する。

結論では，上記のような作品中での共同体像の変化がコンラッドにとって何を意味していたのか考える。コンラッドは長く読者に恵まれず，批評家には外国人であることばかり取り沙汰され，*Under Western Eyes* を書いた頃には他の作家との意見の違いも表面化して非常に孤立した状態にあった。こうした苛酷な体験の連続が，読者を理想の共同体として創り出そうという意欲を殺ぎ，技巧をつくして読者を作品中に招こうという試みを諦めさせたのではないだろうか。

論文審査の結果の要旨

ディケンズ，サッカレイなどに代表される十九世紀小説は神のような立場から作品全体を見渡す全知の語り手によって語られていたが，ジェイムズの主導の下に世紀の後半から視点を一人の作中人物に限定した書き方が次第に好まれるようになる。相対的な世界観が力を得るに伴って小説の語りの方法に関する意識はこの時期に大きな変革を見せた。初期モダニズムの小説家ジョゼフ・コンラッド（1857—1924）も語りに工夫を凝らした作家の一人であった。『闇の奥』（1899年）の基本的なプロットはアフリカの奥地でカーツと出会うマーロウに関するものであるが，この小説は，テムズ川に浮かぶ船の上でマーロウが数人の仲間を相手に自分の体験を物語り，それを聞いていた一人が読者にこれを報告するという構造を持つ。つまり，主たる物語の外側に語りの枠組が設定され，いわゆる入れ子細工のようになっている。ここからモダニズム文学特有の曖昧性，多義性が生じることになる。コンラッドはこのような形式を持つ小説を好んで書いており，本論はこの枠構造に焦点を絞ったコンラッド小説の語りの研究である。全体は四章からなり，『闇の奥』，『ロード・ジム』（1900年），『西欧人の眼の下で』（1911年）の中・長編，および入れ子構造を持つ全ての短編小説が各章で考察の対象となっている。コンラッドの世界に於いて，人物がある「共同体」（例えば船員仲間）に属しているという連帯意識が重要な意味を持つことは夙に指摘されてきたが，論者はここで取り上げた作品を丹念に分析し，後期に移行するにつれて「共同体」——そしてそこから敷衍して，読者——に対するコンラッドの信頼感が減少していくことを論証する。

『闇の奥』に於けるマーロウの語りについては，(1)彼が仲間たちに自分の経験の意味を苦心して伝えようとしている，(2)聞き手たちの帝国主義的搾取への加担を責めている，(3)聴衆を意に介さず単に独りごとを言っている，の三通りの解釈が提示されてきた。論者はそのいずれの解釈も聞き手にとってのマーロウの物語の意味を考えたものであって，その逆の視点，すなわち，物語をするマーロウにとっての聞き手の意味を考えようとする視点がこれまでの批評には欠落していたと指摘する。文明人としての節度を越えてしまったカーツの行動を見た恐怖と，それについてカーツの婚約者に虚偽の報告をすることを強いられたマーロウは，心の重荷から解放されるためにこの物語を語らざるを得ない。そのために聞き手はどうしても必要になる。海の絆で結ばれている「共同体」を代表する聴衆はこの点彼にとって理想的なものである。ところが，近年のフェミニスト，あるいはポスト・コロニアル批評ではこの人物たちは男性中心主義的，帝国主義的であるとして厳しい批判

を受けてきた。『闇の奥』はマーロウの聴衆と同じ白人中産階級の男性のみを読者として想定しており，現在の読者は極力この聴衆と一体化することを避けねばならないというわけである。論者はこれに対してテクストの言語に密着した精緻な読みに基づいてこれらのイデオロギー先行型の批評の一面性を明らかにし，この作品がそのような限定を越えたものであることを説得力をもって論じている。

『ロード・ジム』ではやはりマーロウが船員仲間と考えられる聴衆を相手に，船を捨てて逃げ出したという汚名をそそぐことに命をかけたジムの話を語って聞かせる。ジムの行動は地に足のつかない危険なロマン主義と切り離すことが難しいため，マーロウは彼に強い同情を覚えはするものの，余りに肩入れが過ぎると船員仲間との連帯を失うことになる。従って彼の物語は非常に微妙なバランスの上に成り立っている。論者はマーロウのレトリックを，この人物がしばしば用いる one of us（我々の仲間）というフレーズに着目しつつ，詳細に分析する。これはよくある切り口だが，本論の特色はそのフレーズの意味をダイナミックなものととらえ，語りの進行に伴う意味の変化を検討したところにある。『闇の奥』に比べれば，マーロウは「共同体」からの落伍者ジムに個人的に同調する分だけ聞き手たちに対して懐疑的になっており，「共同体」への連帯意識は薄れていることを論者はここで明確に例証している。

『西欧人の眼の下で』は名前を与えられていない英国人の語学教師が語り手であり，読者が読むロシア人の主人公ラズモフについての物語は，ラズモフが残した日記をもとに語学教師が再構成したものという体裁をとる。従来からこの作品に対するドストエフスキーの影響はよく言われてきたが，論者はここで「告白」というモチーフに焦点を絞り，如何にコンラッドが『罪と罰』にあるような描き方を避けようとしたかを示している。論者はまたこの小説の中心をラズモフがナタリアに自分の罪を告白する場面と捉え，聞き手がこれまでのように「共同体」を形成するのではなく，個人であることに着目する。そして，他の作品とは異なり，語りの外枠（即ち，語学教師がどういう形で誰にこの話を語っているか）が明確でないのは，作者が読者を取り込もうとする試みを諦めた，という気持ちの現れだと推論する。確かに，自分の作品が全く理解されなかったコンラッドの失意，およびこの時期に重なって起こった作者の対人関係に於ける挫折など，論者の推測を補強する伝記的な事実も少なくない。

以上の三作品を時代を追って検討してみると，「共同体」に対する信頼が減少していき，かろうじて個人間の連帯の可能性のみが残されている，という推移をはっきりとたどることができる。短編小説を取り扱った第四章では，語りの枠構造を用いた作品を創作年代順に追うことにより，長編小説に見られた傾向がここにも見られることが丁寧に論証されている。

本論は入れ子構造を持つ作品の通観としては非常によくまとまっているが，『西欧人の眼の下で』の次に書かれた長編『チャンス』（1914年）にも複雑な語りの構造が見られるため，この小説に関する踏み込みが足らないのはやや残念である。また，コンラッドには『ノストロモ』（1904年）『密偵』（1907年）などの全知の語り手を採用した優れた小説もあり，語りの方法が違うことから生じるこれらの作品との内容の比較検討が行われていれば，さらに興味深い成果が生まれたはずである。このあたりは論者の今後の研究課題となろう。とは言え，例えば『闇の奥』のような，研究され尽くした感のある作品について，論者が二次資料を十分に読みこなした上で，独創的な観点から興味深いテクストの読みを発展させたことは優れた業績として特筆に値する。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年12月14日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。